

浄土

十月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受記録第三五二号)
昭和四十三年九月二十五日 印刷 昭和四十三年十月一日 発行

第三十四卷

第十号



自 然 の 恵 み

深まりゆく秋の宵、ひとときの静寂が心の安らぎをおぼえる。秋はまた、みのりの季節である。一年のながい間の丹誠が実を結んで、自然の恵みが豊かにみのりを得る。

大自然の恵み―この言葉は、過去のものとなりつつある。人間の力で自然を支配しているというおもいがりのつよい現代人には、謙虚に量りしれない自然の力に対して敬虔な気持ちで感謝するというような、心の豊かさをもちえないかもしれない。

しかし、科学や文明の進歩を生み出すところの人間を育てるものは、自然であり、大地である。

現代人は、自然の力やところを、もっと大切にしなければならない。自然と人間との対話、そのなかに、人間のまことのところが養われる。いま頃の季節に、浄土宗のお寺でおこなわれるお十夜の法要は、自然の恵みへの感謝とお育てのよろこびを味わう大切な意味合いがある。

もろもろの愚者も月さす十夜かな（一茶）

—目 次—

表紙「くり」松濤達文画

お 十 夜……………藤田 得三… (2)

祈るころ……………坂田 文三… (4)

ご法語をいただく…………… (7)

座右の銘 ①私の生活指針三則

……………中島 真孝… (8)

徒者 (いたずらもの) ……大南 竜昇… (10)

維新のころの人たち④…………大橋 俊雄… (15)

現代生活と宗教① 宗教の日常性

……………奈良 博順… (18)

読者の声 秋に想う…………… (21)

俳人 一茶の生涯②…………大和 琴二… (22)

道……………横沢 三郎… (26)

現代宗教論<その一>…………竹中 信常… (28)

新刊紹介 「こうすれば子どもはのびる」

…………… (32)

法 然 上 人 御 法 語

うたがひてこれを信ぜずば、弥陀の誓願、釈尊の所説むなしくして、
そのしるしあるべからず。ただあふぎて信ずべし。



お十夜

藤田得三



庫裡門を入ると右手に一本の柿の木がある。訪れる人は、この柿の木を見上げながら、うなづくようにしてやって来る。「今年は毛虫の害がひどいな」と思っているのかなと想像していた或る日、出入りの職人が、「今年も、もうすぐお十夜ですね」と柿の木を見上げながら言った。その時、なるほど「見上げてうなづく」のはそのためだったのかとわかった。この柿は、お十夜頃にならないと渋くて食べられないのである。側を通りながら、実の赤味加減、ふくらみ加減でお十夜まで後何日位と判断していたのでした。自然の暦であったのです。十夜法要の勤修される季節にこの地方の柿は、青空の澄みきった中、赤味を一段と艶やかに映える。又境内に並ぶおでん屋焼まんじゅう屋サーカス見世物玩具店その他の露店の直中においしそうな柿を売る店が、でんと位置しているのである。その店の数も毎年沢山である。参詣のお年寄り

「お十夜には、やっぱり柿を喰べなくっちゃ」と云い、若い人は、「こんなに沢山柿を売っていて、もうかるのかな」と何軒も店を出しているのを見て話し合っている。そして買って帰る。子供は買ってもらった柿を喰べながら、玩具はどれにしようかとか見世物の看板を見上げ呼び込みの声に入ろうかどうしようかと足を止める。本堂の中でも、法要の合い間に柿を喰べているのが、後片附けの時に種の落ちていることより知られる。一方、手伝の職人達も又、仕事の合間々々に例の柿の木にのぼり、甘そうなものから順にもぎ取っては喰べている。今では、この柿の木は職人達専用の柿の木となっている。このように柿が到るところに顔を出してくる特徴をもつお十夜で「柿十夜」と呼ぶ人もいる。

このように御回向の特徴郷土色によりお十夜も、双盤十夜・塔婆十夜・諷誦十夜等々と呼ばれている。

これら姿・形の変ったお十夜も、その因つてくるところは、即ち、無量寿経巻下の「ここにおいて善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において、善をなすこと千歳なるに勝る」又、阿弥陀鼓音声王陀羅尼經の「かの仏の名号を受持するものあり、その心を堅固にして憶念して忘れず、十日十夜」すればその人はよろこびを得、その因縁を以て所願を成就するなどと説かれていることから出ている。

こうした十夜念仏が浄土宗寺院の独自の行事となった機縁は、鎌倉光明寺の八代観蒼祐崇上人が、後土御門天皇の明応四年十月（一四九五）召されて宮中に十夜法要を修され、又勅許を得て光明寺にこの法要を移すと共に、広く浄土宗寺院に伝えられたことにあった。昔時より今日まで、人のあるところその生活と結びついてお十夜は歩み続けてきたのであり又、歩み続けてゆくでしょう。

柿を眺め味わいつつ考えることは、經文に「この世の有様を財貨や愛欲に執着して、人に与える氣持が持てず、無智と愛欲にせめられて、考えることが次から次へと迷いになり、それに縛られてほどこけず、自分の利益ばかりを厚くしようとして他人と争い反省せず、富や名誉や繁榮などが現われるたびに溺れて、堪えるということが出来ず、努力して善を実行することなく、まもなく尽き果ててしまい、苦痛のただ中に坐

するようになり、その苦痛も時につれて甚だしくなる。その結果、悪をなした者はひとり寄る辺もなく、恐れ戦きながらその裁きを受けるようになるであろう」と説くところに十日十夜善を修する意義が生まれてくるのであるということである。そして、善を実行するには、恩恵を布き、与えることをし、道に違背せず、忍耐と、努力と、精神集中と、知慧と慈悲の心をもって実行しなさいと教えてくれる。現在、私達の身は多くの悪に取り囲まれている。この社会の中で、善をなすことは大変な努力がいる。どうしても苦しみ欲求して次から次へと偽り欺き、心も体も欲しくなつて、あわただしく生き、安らかさがなくなる。この時目覚めた人阿弥陀様は、人間世界を人間世界たらしめる愛である大悲の光へ人の苦しみを自分の苦しみとみる直実の友情・純粹の親愛の念で私達の心を洗い清めてくださり、豊かな、平和な、慈悲にあふれた世を築くべく手をさしのべ、励まし導いてくださるのである。この御恩に報いるべく、又、私達が毎日こうしていられるようにしてくださった両親・先祖の恩と一年の収穫を感謝せねばならぬのが十夜会である。

十夜とて袖ふり合うものしや

とお十夜を楽しみその意義を体の隅々にまで漲らせ、清らかな心で念仏の明るさの中に正しく歩もうではありませんか。



三 文 田 坂

私達が生きて行く上において、悩みとか苦しみとか悲しみとかいうものは全く絶えないものです。歎びや楽しみに相前後して、いつも不機嫌な顔色をしてやって来ます。或る時は約束されたもののように、また或る時は不意の訪れとして、荒々しく凶々しく私達の領域に侵入して来ます。生命あるもののこうした苦悩は、当然のことながら不安と迷妄です。凡そ、私達のまわりに取り付き纏（まと）う奈落は、私達が歎び勇めば勇む程に、大きく無情に満ちた様相を現わすのです。

仏教の説くところでは、このような人間の苦悩の根本原因として、生・老・病・死の四苦を示します。そして更に、愛別離苦〔愛するものとは必ず別離しなければならぬという苦〕・怨憎会苦〔怨み憎しむものとは会わなければならぬという苦〕・求不得苦〔求めても得られないという苦〕・五陰盛苦〔人間の身心を形造る五陰（五蘊）をもととして盛んに起る苦〕との四つを加えて、四苦八苦の根本の苦しみを説き教えています。人間界の様々な営みが行なわれる中で、これらの苦は私達のありのままの存在と表裏一体を成しているものなのです。おのづと人間本然の姿を見ることができなのです。

けれども、私達の存在自体があくまでこうした暗い悲劇的な道筋の上にあるのかという点、必ずしもそうとばかりは言えません。嬉しいこと、楽しいことも、明るい喜劇的なものも当然あるわけなのです。しかしながら、往々にして、苦しみや悲しみが私達の前途への飛躍に大いなる影や光を投げ落して来るのも確かなのです。微笑みばかりでなく、涙や苦渋の面持ちが報われる、その時というものがあるのです。

恐らく人間の心情というものは、このような世の中の苦楽混然としたものを絶えず敏感に受けとめているわけなのですが、それから自然に醸（かも）し出されて来る様態（さま）は誠に不安定なものです。一般に、心情とは「こころのおもい」という意味であって、私

いた。つまり明恵のまわりの人々が受け取ったものは、むずかしい教理ではなく、樹上に坐禅し、聖教を如法に実践した上人の豊かな宗教性であったのである。

壮大なまじりの世界をつかんでいた明恵の人間像はどのようなものであったか。彼が理想として掲げていた「あるべき」人間はどのような姿であったか。この「あるべき姿」と明恵の人間性とはどこかで二重合せになっているはずである。

明恵は、常に仏道修行に志さす人に対していつていたという。

仏になりても何かせん。道を成しても何かせん。一切求め心を捨てて、徒者に成還りて、兎も角も私にあてがう事なくして、飢来れば食し、寒来れば被るばかりにて、一生はて給はば、大地をば打はづすとも、道をうちはづす事は有まじき

この言葉の意味は大略このようであろう。仏に成るとか、



仏道を成就するとかいう法に對する愛をも捨て、一切の欲望を捨てきって徒者、即ち無用者に成り還って、自分を中心を考えること、

即ち我執をなくして任運自在に飢や寒さを受けとめて一生を果てるならば、「大地をはずすとも」即ち世間的な常識人ではなくとも、「道をはずすこと」即ち仏者としての生き方からはずれることはあるまい。上人のこの教訓をきいて、よくその本意が理解できなかった人がいたらしい。その人は飽きるまで食し、飽きるまで睡り、雑念と雑談に明け暮れ、自分に有縁の人々に何等利益を与えなかった。この人は徒者の意味を誤って受取った。明恵はかの人を「畜生のいたずら者に成還りたり」と呼んだ。そして自分がいう徒者とはこうだと説明するのである。

先身心を道の中に入れて、恣に睡眠せず、引まみに任て雑念をも起さず、(略)仏に成らんとと思わず、道を成ぜんと願はず。人中の昇進更に投捨て、一切求める心なくして、徒者に成かへりて一生はてんと、大願を立給へとなり。

徒者とは、先ず身心を仏道の中になげ入れることだという。この言葉はそのまま道元の正法眼蔵生死の巻の

この生死はすなわち仏の御いのちなり。ただわが身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもつひやさずして、生死をはなれ

仏となる。

を想起させる。

明恵がいう「道の中に入れて」とは道元の「仏のいへにないで」と一つなのである。そして身心を仏道になげ入れたものが徒者であり、それこそが「あるべき仏者の姿」だといふのである。

徒者に成還するためにはどうせよというのか。明恵はいう「一切求め心を捨てて」と。

と。捨てること、棄捨することが道をはさず、任運自在なる仏果を成ずることであつた。

道元もまた、棄捨し、放下するという。正法眼藏隨聞記の中に「学道の人は人情を棄つべきなり」「身心をば一向に捨て」と棄捨の言葉は無数に出てくる。道元に於ては捨てに捨てたる身心脱落の世界が、反つて万法に証せられる世界であつた。

我々はここで、念仏門の先達が、この道元や明恵と同じ「捨てる」世界を遍歴したことを思い起さねばならない。弘法や行基と同じように社会事業をして廻り、市聖といわれた空也はある人に念仏の申し様を問われて「捨ててこそ」とのみいて他にに言われなかつたという。空也の念仏の根本をそのまま受継ぎ、徹底的に実践したのが、捨聖とい

われた一遍であつた。

一遍が自分の先達と仰いだ他の人に教信沙弥があつた。親鸞も教信の非僧非俗の生き方を受け継いだのである。

明恵や道元に捨てる世界、放下する世界があつたように念仏門の人たちにも同じ世界があつた。

法然上人が諸仏の中に弥陀に帰し、「諸行の中に念仏を用いる」と宣言した時、そこには、選択本願という「選びとる世界」があつたが、同時にその裏に「捨てる世界」が動いていたのであろう。

「徒者に成還る」とは、浄土教の「還愚」の世界と次元を異にした世界であらうか。

話を上人に戻そう。

捨てきり、徒者に還つた人は、どのような人格となるのか。

明恵は峻烈な末法批判の精神の裏に、任運自在な徒者の境界を願ひ、悟りの世界に柔和質直者という大らかな人格を描いていたのである。

なんでも捨てて身に装ひ、遍狭な知識人となろうとする現代人にとって、明恵のような偉大な仏教者たちの行なつた、捨て切り、徒者に還るといふ伝統的な精神は、もっと深く知られ、理解されてよいと思う。

維新のころの人たち

—その四—

大橋俊雄

江戸も末つ方となると、勤王攘夷の動きは活発にすすめられ、それは大政奉還によってピリオドがうたれた。こうした朝廷対幕府の対立関係は、明治の世を迎えてさえ、新政に心よからぬものをもっていた人たちのなかには、幕府の再起をはかりたいと、真剣に考えていた人がいた。大俊もその一人であった。

大俊は尾張津島在の片原一色に生れ、善応寺で、時の住持説応につき出家した僧であったから、私はもの心ついたところ同じく善応寺で僧となった父から、よく軍鶏籠（うまどりかご）で東海道を江戸に護送された大俊の名をしばしば耳にした。

大俊といえは、雲井竜雄を思いうかべるほど二人の交友は親密で、隔意なく往来していた。或る月明の晩、大俊は竜雄の寓所であった京橋西紺屋町数寄屋河岸の舟宿稲屋松尾太兵衛

をたずねていったところ、あいにく留守だった。そこで顔見知りの太兵衛の母およしは「日暮れごろ、お出かけになりました。どちらへ行ったか知りませんが、ほどなく帰って参りましょうから、しばらく雲井さんのお部屋でお待ち下さい」といって部屋に通された。言われるがままに部屋にさがりこみ、手近かにあった書物を見ているうちに、いつしか眠ってしまい、四つを知らせる夜廻りの拍子木の音におどろき宿の者に聞いて見れば竜雄はまだ帰って来ていないという。大俊の心中はなはだ面白くない。その辺にあった紙片に、たわむれに悪口を書き、そのまま密雲寮に帰って来てみると、あにはからんや竜雄は自分の部屋に来て寝こんでいる。竜雄とて、大俊の帰り今やおそしと、待ちくたびれて寝こんでしまっていたのだ。双方で待っているながら、いつの間にかねむっ



大俊肖像

てしまったことがわかり、二人はともに手を叩いて大笑いしたという。兩人はこんな仲だった。

二人が相い知るようになったのは、明治二年十一月のころだったらしく、その紹介者は米沢の中川雪堂であった。雪堂は、当時藩主の菩提寺芝白金台町の興福寺に仮寓し、大俊は密雲寮にいたが、この寮は資産があり、二三の藩に融資していた。米沢藩にも融資していた関係で、或日雪堂が寮に来

たとき、はじめて大俊に会い、彼の詩を見て、非凡な詩才を喜んだのが、そもそも二人が相い知るようになったはじめてであったという。

翌三年竜雄は、徳川氏にかわって薩長の二藩が天下を牛耳っているのをみて腹だたしく、芝二本榎の上行・円真の両寺に「帰順部曲点検所」という看板を掲げて、同志をつのりつつあった。大俊もまた竜雄の意を汲み、同志をあつめ援助の手をさしのべようとして、表面的には亡父の一周忌をよそおい、郷里の尾張に帰ることになった。かくて大俊は密雲寮を辞し、円真寺に行き、竜雄の部屋に三四日とまり、起居をともしして別れを惜しんだという。しかし、竜雄の計画は未然に発覚してしまった。こうなつては、大俊とてただではすまされない。彼はしばらく師範の善応寺に帰って滞在していたが、その後四日市の光運寺に行っていたとき、人相書が廻つて来て、ここで捕われ、名古屋の藩獄に送られた。ここから軍鶏籠で江戸に護送され、伝馬町の牢屋につながれ、しばしば紮問を受けたのち、同年十二月三年の徒刑が言い渡されて、佃島の獄におくられた。

大俊は片原一色の百姓鶴飼正右衛門の次男として生れ、十才の四月善応寺に入り、説応の弟子となり、ここにおると七年。十八才になった九月江戸に下り、増上寺山内の秦密

雲の寮に修学のため滞在したが、時に彼がなぜ竜雄にくみしたかといへば、廃仏毀釈によって仏教をないがしろにするようになったのは、新政権をにぎった薩長の指示があつたからだ。とすれば、薩長こそは仏法の敵であるという考えからであつたらしい。

同六年刑満ちた大俊は、佃島から再び密雲寮に帰ってきた。しかし、当時増上寺には神仏併合の大教院が設けられて

信惠程見可時款田家客烟霞
自為吾鄉客漁為吾親仕祿為漁漁
為市山 信惠程見可時款田家客烟霞

大俊筆跡
—高木藤太郎氏藏—

よってつくりあげられたというても過言ではあるまい。

こうして彼は、仏教界のために大いに
尽力したが、肺を病み、同十一年一月十
五日、

三十余年夢惡真
吟哦風雪月花春
一朝夢覺忽歸去
十萬億程駕願輪

という辞世の詩をのこし、増上寺山内の和光室、すなわち自分の学寮で入寂した、時に年三十三。

や、直ちにこの試験をうけ、中講義に補せられた。二十八才のときのことである。中講義といえば高級将校であり、つづいて拔擢されて試験官ともいうべき講究課出仕となった。すばやい彼の出世に、つい先きごろまで獄につながっていた人が今や中講義、しかも講究課出仕となったと聞いておどろい

山下現有は、大俊について「実に剛毅の人であつて、死にのぞんで死をおそれず神色自若として逝かれた、誠に素晴らしい人であつた」と語っているが、詩を好んだ大俊と現有は、詩を通じて交わり、大俊の死にのぞみ、現有は臨終の善知識をつとめられたという。

現代生活と宗教

第一回

宗教の日常性

奈良博順



宗教を現代生活の中に何ら抵抗なく取り入れるにはどのようにしたら良いか。この問題は今まで、ともすると裏に追いやられ、考えられずに来ている。そこで数回にわたり各方面の方々に、この問題について日頃お考えの一端を寄せていただくことにいたしました。

——編集部——

「現代生活と宗教」という課題は、要するに私達が生きているこの時代において、宗教がはたして私達の生活に何らかの関係があるのだろうか、あるとすれば、いかなる意味においてか。逆にないとするれば、いかなる意味においてか、そういうことを問うているのであらうと思う。これに対する解答は、これを見る角度によって変わってくるであらうが、以下、近頃感じていることを、のべてみたい。

—

過日、ある仏教系大学の留学生であるアメリカ人と、たまたま同席する機会があった。話が自分の専攻学問の話になった時、私が、今は主として日本の倫理思想に関心を持っていると言ったところ、彼は「日本に倫理思想などあるのか」と、さも驚いたような顔をした。というのは、彼等にとっては、倫理ないし道徳とはキリスト教の教理と同義だといふのである。そうなら、仏教徒にとって、仏教々理と道徳倫理とは同義である、ということにならうが、それはともかく、彼等の立場では、宗教と道徳との結びつきは自明のことであって、宗教的な根拠のない道徳は考えられない、ということになるのであらう。

次にもう一つの例を引こう。いささか古い話になるが、私が大学を卒業したころ、やはり同じ年に大学を卒業した友人を訪ねたところ、あいにく留守であったが、その理由は、彼の父親の話によると、「大学で知識や技術を身につけたから、人間としての道を教わるために、自分も以前行ったこ

とのある某修養団体へ行かせてあるというのである。その友人の家は、いわゆる旧家で、立派な仏壇もあり、以前行った時の記憶では、それは盆や彼岸などにだけ開かれるような、ほこりだけの仏壇ではなかった。だが、先の話を聞いて、その仏壇に象徴された宗教が、その家族の日々の生活と、直接には関係ないものであることに気づいた。しかし、これは特殊な例ではなく、日本における宗教と道徳との関係を端的に物語っていると思われる。

それは、道徳はこの世のもの、世俗の生き方を示すものであって、宗教はそれを越えた世界、あるいは死後の世界を問題にする、と一般に考えられて来たからであろう。落語に出てくる、念仏を唱えながら、ヨメをいじめるシユウトメの話というのは、こういう状況から出てくるのではないだろうか。つまり、神や仏に祈ること、日々の



生活とのつながりが、ほとんどないのである。

しかし、現在の日本人の信仰が、こういう傾向にあるといっても、古くからずっとこの通りであったとは考えない。例えば、鎌倉時代の新仏教への道を開いた法然上人の場合、その念仏思想の基調をなしているのは、いわゆる「時機相応」ということであった。つまり、ある時代、社会のかかえているさまざまな問題に対する解答をもつ、ということであった。事実、法然上人を中心とする専修念仏は、旧教団の人々に滅亡の危機感をいだかせる程、大きな社会的力となっていた。ということとは、その教えが、当時の人々のいまだいていた不安、悩み、疑問に答える何ものかをもっていたからであろう。それがどうして、現在のようになかったか、その原因はいろいろ考えられようが、ここでは問題にしない。だが法然上人に従い行こうと思うならば、まず、現在の時点において、「時機相応」とは、どういうことであるか。これから出発しなければなら

ないと思う。

勿論、私は、死後の世界を、あるいは現実を越えた世界を問題にすることは意味がない、と言っているのではない。私が言いたいのは、そういう世界を問題にしなければならぬ人自身が、日常的な世界の中にいる、ということ、そして、その中で直面し、負わされたさまざまな問題の解決をもとめて、そういう世界が問題になってくるのではないか。つまり、いかに現実生活を生きていくかが問題なのではないか、このことである。単に現実を越えた世界のみを求めたのでは、問題を解決したことにならない。逃避以外の何ものでもないだろう。釈尊が人生のはかなさを教え、だから「おこたらずとめよ」といい、法然上人が、「念仏の申されるように、現世をすこせ」というのも、このことを意味しているのではないだろうか。宗教は一般に、いわゆる聖なるもの、究極的なものへの信仰に立つといわれる。だが、信仰する人間といえども現実生活の中にあるのであって、そこか

ら、信仰することが、現実生活の中に、いかに反映するかが問われなければならない、と思う。

二

ところで、日常生活をいかに生きるか、いかに行爲するかの問題は、とりもなおさず倫理、道徳の問題である。が、従来、倫理、道徳という場合、その依り所を、いわゆる理性とか、良心とかに求める場合が多かった。人間の心には、物事を合理的に判断し、道理になつた行爲を命ずる力がある、というのである。たしかにそのような働きや力があるようにも思える。悪いことはしたくないと思うし、嘘をつけばうしろめたい。だがはたして、そういう心の働きが万能であらうか。そういう心の働きのつてのみ、私達は振舞っているであらうか。近頃、交通事故が増加するにしたが



って、交通違反の取締りがやかましくなつた。それにつれて、運転する人も、非常に慎重になつて来た。勿論、取締りが厳しくなつたから、法規を守るのではなく、人身事故などおこすことは、人命尊重という建前からも、許されることではない。だが、運転者の話を聞いてみると、人命尊重などという言葉はおよそ聞かれなない。人身事故でもおこすと、近頃は慰謝料が高くて大変だ、というのである。つまり、相手の命の問題より、こちらのふところの問題が主になつてゐるのである。誰でも人命尊重とか、人間尊重という言葉は知つてゐる。しかし、それがはたしてどの程度身についてゐるのであらうか。こういう例は私達の周囲に沢山ある。理性とか良心とか言つても、それを充分働かせることができればの話であつて、実際には、そうでないのが現実ではないだらうか。

戦後、基本的人権とか、人格の尊厳性あるいは人間尊重という言葉が、国民生活の理念としてうたわれてきた。小中学校の道

徳教育も、人間尊重の精神を児童生徒に徹底させることを目標にしている。だがそれにもとづいて教育されてきたはずの学生が、角材でなぐり合い、大衆団交と称して教師にリンチを加へ、はては重症患者のいる病院まで、自分達の目的を達成するための争いの場にしようとする。また、その学生を受け入れる大学が、いかにしたら真実の教育ができるか、という問題より、何人入学させたら大学の経営ができるかを先に考える。

人間尊重とか、基本的人権という言葉は聞いただけでわかるような気がする。だが一歩立入つて、何故に人間は尊重されなければならないか。尊重されよう人間には、いかにしたらなりうるか、という問題になると、私達は行き詰つてしまふのではないだらうか。

だが、これに答えることは、宗教のみに可能なことではないか。しかもこの問題は、われわれにとつて、第一に解決されなければならないことだと思ふ。

秋に想う



遠く(6)の山々から色づきかけた紅葉は山間いをぬつて、序々にふもとにしのびより、また軒下からはなんともいぬ虫の音が聞えてくる。まことに爽やかな季節、秋の到来です。秋は一年のうちで最も行事の多い季節とこのことですが、浄土宗の各寺院ではこの秋におつとめする行事としてお十夜がこさいます。

今からおおよそ五百年ほど前、平貞国によって、京都東山のふもと黒谷真如堂で修せられて以来、浄土宗独自の行事として催されてきたお十夜は、鎌倉光明寺の双盤十夜。八王寺大善寺の誦誦文十夜。埼玉鴻巣勝願寺の塔婆十夜に代表されますように、郷土色豊かに民間伝承の芸能をまじえたり、古式そのままに伝

承されたりして、地方々々によつて特色があり、その方法は必ずしも一様ではございません。

今日では本来の十日十夜の別時念仏が三日三夜となり、一日のみとその日数が変わってまいりましたが、いずれにいたしましても、今日まで受け継がれてまいりましたさまを考え合す時、各分野で飛躍的な成長を遂げ、心の休まる暇もないほどの昨今、ともすれば、自己中心のわがままな立場となり、その欲求不満から、たえず不安や憂慮にさいなまされながら生きているわたしたち凡夫に、人間のもっている美しい面を引き出し、生きるよろこびを味わせてくれる、このお十夜はまことに得がたい大切な行事ではないでしょうか。

十月は何をしても心快くくらせる時候です。「読書の秋」といわれますように、夜長、おちついた雰囲気の中で本でもよんですごすのも、また格別です。

文書文明とまでいわれます今日、書籍の人

間生活に与える影響は大なるものがあり、その書いている内容はともかくとしても、知らず知らずのうちに人の気持を自分の側に引きこむ魔術が本にはございます。

この本にもいろいろあり、現在八十数種類が発行されている週刊紙のたぐい・小説雑誌・機関誌から、むずかしい研究論文まであります。その厚さも一日たらずで読めてしまう本から一週間以上かけてもよみ切れぬものまで千差万別です。

しかし、本を読むことによつて得る知識が大であることを考える時、本ほど安価なものもないでしょう。一冊の本として世に出るまでに、十年二十年とかけて研究された尊い努力があるのです。ところが、人々はすぐに済める週刊紙には飛びつくのですが、余程の必要に迫られてよむ以外には、こうした研究論文は置き去れた本として扱われやすいのです。これでは正しい読書とは申せません。心の糧として、じっくりよい本をよむ習慣をつけたいものです。

(千葉T M生)

俳 人

一茶の生涯

(二)



大 和 琴 二

四

十五才の春、故郷を出てから十数年ぶり、一茶は寛政三年三月江戸を出て、初の故郷入をしている。一茶は、この時二十九才である。浅野の門人西原文虎が書いた「一茶翁終焉記」に

寛政三年春のころ、しきりに夢見悪しければ、古郷の親ところにかかりて、弥生二十六日大江戸を発足して、さつき十八日といふに古郷にかへりて

門の木も先つつがなし夕涼

とは、老父めでたくおはす半のうれしきあまりにかくならん。

と証している。俳諧師として、ようやく一家をなした彼の

胸中に懐しくよみがえってきたのは、故郷にある年老いた父である。

その父の夢を幾晩もつづけて見た。「毒なる物はたうべなよ、人にあしざまに思はれなよ」といい論してくれた父弥五兵衛に十数年ぶりで対面したのである。

寛政三年、十数年ぶりに故郷入りをして、老父の安否を確かめた一茶は、ひとまず江戸に引返した。

この頃から、一茶は二六庵の俳風にあきたらぬものを感じた。かれの個性が、その句作の上に顕著になって来たのである。二六庵にあっては、師の遺風を守らなければならない。しかも周囲の眼が、そろそろ一茶に白々しく向けられるようになった。狭い二六庵にたてこもるよりも、かれは自由の立



祈 る こ こ ろ

達を廻（めぐ）るアレコレへ思いを馳せさせる、その心根のことなのですが、この「おもい」こそ実に不安と惑乱と煩雜そのもののなのです。即ち仏教でいう煩惱とも言えましょう。仏教では、その究極の目的としての悟りを得る為のあらゆる妨げの作用をこの煩惱という言葉に帰していますが、しかし、私達の言う心情とは、決して悪い意味合いとしてのみ使われるものではなくて、むしろ「情感溢れる」などという言葉から良い意味合いとして使われる方が多いのかも知れませんが、蓋し、人間は必然的にこの幾重にも絡み合った束縛から逃れ得ぬものなのです。そして、「おもい」は絶え間なく流れ流されて、善惡正邪一体となった私達の日常経験の一つ一つ積み上げて行くのです。

倉田百三は『出家とその弟子』において、次のように書いております。

左衛門 ……けれど其のような心持は直ぐに乱されて仕舞います。一つの出来事に当れ

ば直ぐに変わります。そして私の心の中には依然として、憎みや怒りが勝を占めます。そして地獄を証するような感情ばかり満ちます。

親鸞 私も其の通りです。それが人間の心の実相です。人間の心は刺戟によって変じま
す。昔の聖者はそれを「定散の凡夫」と仰せられました。私たちの心は風の前の木の
葉の如く散り易いものです。

私達の心は全く微妙に揺れ動く一水の流れにこそちがひありません。畢竟、信仰の心も
そうした考えを知る人にとっては必然でしょう。

生命を運んで行く力、それは果して何なのでしょう。あこがれや懐しさとは、どうい
うことなのでしょう。宗教の意志は、どこにあるものなのでしょう。如理の信念は澄み切っ
た凝視です。張りつめた緊縛、切れるばかりの一筋の糸……私達の歩むべき道は、冷徹
にして困難極まりないものです。

場がほしかった。

寛政四年春、かれは意を決して、二六庵を脱し西国行脚の長途に上っている。このとき三十才である。その足跡は、京阪、中国、四国、九州にまで及び、前後七ヶ年にわたる大旅行で、その構図の壮大なことは、一茶の生涯を通じて、特筆すべきものであった。

この一茶の西国行脚には、三つの目的があった。その一つは、いうまでもなく、みずからの俳諧修業であった。一茶にとっては、江戸といえども旅に相違ないけれども、爛熟し類廃した江戸の空気は、そのまま江戸俳壇にも浸潤していた。

一茶は、こうした空気からのがれたかったにちがいない。西行や、芭蕉も、一生を旅に住し旅に終ったのである。これらの先人を慕うところがしきりであった。

もう一つは、先師弁阿は、よく西国を歩き、西国に歿した。西国の風物と人に対するあこがれである。弁阿の杖の跡をさぐり、その遺弟や知辺をたずねて、亡師を偲び、それを弔いたかったのである。

最後の一つの目的は、老父の宿願である、本願寺代参を果たしたかったのである。一茶の父は、継母、継子のあらそいを解決できなかったほど心弱い男であった。このように心弱い男であればこそ、家代々の宗旨である真宗に対しては、かた

くなな信仰をささげていた。

京都の本願寺参りは一生の心願であったけれども、もはや老齢、その望みを果すことおぼつかなく、一茶にその代参を依頼したのである。

五

草枕せんと人に留別

いつ逢ん身はしらぬひの遠がすみ

前途の時雞髪して、

剃捨てて花見の真似やひのき笠

寛政四年三月、人々に留別して江戸を発足した一茶は、この時はじめて雞髪している。「花見の真似や」という戯れの言葉のなかには、長い長い俳行脚に身を託そうとするわびしさがこめられているし、「しらぬひの遠がすみ」には、「不知火の筑紫」を指して発足するのであるという意図が語られているのである。

通し給へ蚊蠅の如き僧一人

関所関所の手形改めも、「蚊蠅の如き」とみずから卑下する僧形であればこそ、無事通過することができたのであるう。

浜松や蟬によるべの浪の声

風はやや三保に吹入る蟬の声

と東海道をすぎて京都に入り、本願寺代参を無事に果したのち、京都の風物を心ゆくまで吟懐するとともに、京都の俳友を歴訪し、この年のうちに四国へ渡った。

淡路

魂迎見ぬ世の人を松穂がた

四国へ渡った一茶は、亡師のゆかりを求めて観音寺の専念精舎を訪ねた。

花ぢやそよ我もけさから 卅九

寛政五年は一茶三十一才であるから、三十九は言葉のあやであるが、この句によると、一茶は、この年四国から、さらに九州に渡り、熊本をすぎて八代で迎年した。

君が世や唐人も来て年ごもり

から人と雑魚寝もすらんと女哉

と長崎に年籠りし、寛政六年の歳見を迎えた。

初夢に古郷を見て涙かな

ここでは正直に涙をこぼしている。

故郷にいられない継子一茶であればこそ、一層故郷を慕う心が切実であった。旅の孤独感が、ひしひしと一茶の全身をおそったのであろう。

寛政三年から寛政十年まで、前後七ケ年にわたる西国行脚をおえた一茶は、享和元年（三十九才）たまたま江戸から帰

郷して、父弥五兵衛の臨終にあっている。

「父の終焉日記」によると、四月、弥五兵衛は、庭前で茄子苗に水をかけていたが、突然傷寒という熱病にかかって床に臥すようになった。陰性の傷寒では、万に一つも助からないという。氣も転倒するばかりに驚いた一茶は、ひたすら枕頭を守りつづけたのであるが、父もその余命すくないことを知って、苦しい息づかいのなから、財産分配を遺言し、父亡きあと、争いごとのないように懇々と言い訓した。

しかし、このような重態の父をめぐって、継母対一茶のあらそいは、いよいよ深刻化されていた。継母の罵声は、病み細る父の身の上までおよび、険悪な空氣をはらんだまま父の病氣は、重くなるばかりであった。医者もついに匙を投げ出した。医者に見放されては、秘法仏力にもすがりたいのであるが、父は念仏行者であって加持祈禱などは許さなかった。

善光寺御抱医塚田通有、この人は百里と号して、いささは俳諧もやっていた。この通有を招いて診断してもらったが、まえの医者と同じく助かりそうもないという。しかし、とにかく、薬を盛って様子をみてくれたが、夜が明けるころ父の調子は大部よくなった。一茶も安堵の氣持ちで、通有を見送ったが、折から鳴いた時鳥の声も、初音を聞くように思

われた。

時鳥我も気あひのよき日なり

日頃、父は、自分が往生を遂げたならば、お前は私の言いつけた通り、妻をもとめて、故郷を遠ざかることのないようにと重ねて言い訓した。

六

その父も、ついに六十五才を一期として静かな往生を遂げた。一茶はいうまでもなく、昨日まで父とあらそった継母や継子伝言も、いまはさすがに屍にとりすがって泣いた。

一茶は全く天涯孤独の身となった。父の遺言をまもり、妻を迎えて家にとどまることは、むしろ一茶自身の宿望でもあったけれども、継母たちにとっては、それは迷惑至極なことであった。

父の遺言をまもるべきか、家の平和のために再び旅に出るべきか、煩惱に煩惱を重ねた一茶も、継母たちの邪慳な仕打に堪えかねて、また漂泊、流浪の身をゆだねなければならなかった。

父の歿後、肉身間のあらそいをあとに、再び故郷を捨てた一茶の、その頃の生活は、よほど窮迫していたらしい。

けふ一かたけたらへざりしさへかなしく思ひ侍るに、

古へ翁の漂泊かかる本日となるべし。

三度くふ旅もつたいな時雨雲

と書いている。「一かたけ」は一食のことである。今日一食を欠いたことさえ悲しく思われるのに、芭蕉の行脚には、こうした苦難が幾日も続いたのであろう。

ほんとうの旅のさびしさに徹するには、自分はいかに人間らしい人間にすぎるといふ自己反省である。しかし、一茶が人間的であればあるほど、そのわびしい生活心境には、現実そのもののきびしさがこめられている。

一茶の本所での生活がいつまで続けられたかはっきりしないが、「文化句帳」（文化元年―文化五年）には、文化三年九月に「おのれ住める相生町五丁目」云々とあり、さかのぼって文化元年の師走の句に、

選当し庵に寝ても師走哉

とあるから、この頃から相生町に転居したらしく、その生活は、相変らず窮乏のどん底であったらしい。

文化四年十月、一茶は国に向って江戸を出発することになるが、「国に行かんとして心すすまず」と、ひとたび王子から引返したほどであった。古郷に帰ってみると、案の定、継母達はいくまで、一茶に対して冷酷であった。父の臨終をめぐる、あの日の空気と何ら異なるところがなかった。

（続く）

道



横 沢 三 郎

暑さが幾分やわらいだ九月四日の早朝、車は快適に甲州路を走っている。私の年中行事の一つともなっている祖父母の墓参りのために、甲府市郊外へ向う途中である。山道をぬって進むこの甲州路、前の狭い砂利道から、完全舗装がなされ、走るのが大変楽になった。

難所とされていた笹子峠も自動車専用トンネルの完成により、わずかの時間で通りぬけることができるようにさえた。この甲州街道で都心からの最初の難所、大垂水峠を過ぎると、眼下には朝もやの中に静かに水を貯えた相模湖が開けている。窓を打つ風はひんやりとしていて、この時期の都心では味うことができぬ程、とても気持が良い。相模湖からその上流に向うにつれ、車の右

側は切り立つ崖、左側は深い峡谷となりさながら獲物を追う蟻のように蛇行しながら走って行く。まもなく笹子トンネルだ。このトンネルは先にも触れたように甲州街道を往来する車の難所として、大垂水峠と共にその双壁とされていたが、今はその苦労はまったくなく、かえってエンジンの調子をあげてくれるかのようにその中はひんやりとしていた。このトンネルを境にあとは甲府市内まで下るだけである。勝沼附近より車はその実の重さでツルが折れんばかりに突っているぶどうのトンネルを通りぬけ、やがて石和の温泉郷を経て、甲府の市内に入っていた。

それにしても、この甲州街道にかぎらず、全国各地を

結ぶ幹線道路は漸々に良くなりつつあります。東京オリ
ンピックの際作られた首都高速道路はその後の工事で都
心から郊外へぬけられるように延びつつあり、また名神
高速道路によってその幕がおとされた全国縦断高速道路
も、明年全面開通をみる東名高速道路等、各地で着々と
計画が進められているようだ。いよいよわが国も本格的
ハイウエー時代の到来と、その完成が待たれているとこ
ろである。

しかし、このようにはなやかな脚光を浴びている道の
みが道ではないのではないだろうか。

「みち」この世には様々な道があります。交通戦争の
場とさえなっている道路から、山あいをぬう落葉におお
われた里と里とを結ぶ小道、これら眼に映る道。また、
『この道幾十年』などと、テレビ・ラジオなどで取りあ
げられる、一つの事柄に一生を捧げた人の歩みを支える
眼には映らぬ、心の中に延々と続く道などもあります。
このように私達の周囲にはいろいろな、つまり身体を
もって経験する前者の道、心的に味得する後者の道があ
ると思います。

これら様々な道を様々な人が様々な目的目標のもとに

歩み、走り続けているのです。同じ道を往く人々でも、
一人は喜び楽しさを感じているかもしれないませんが、他の
人は悲しみ、つらさをこらえているかも知れません。

「みち」それはその上でくりひろげられている様々な
人生のドラマを見とどけております。たといその上を通
したくないような邪まな人々が通ったとしても、口には
出せず、ただ、正しい道にもどることを願いながら踏れ
ているかも知れません。

多くの歴史をひめた道を私達は今、歩み続けている訳
ですが、この道を正しく歩むも否も私達一人一人が自分
に課せられた使命をはたし、また日頃の行為一つの中
にもくんで歩む外はないのではないのでしょうか。

「みち」文章に、またことばの上ではいとも簡単に表現
できることですが、いざ日常の生活の中に考えると、これ
程難しいこともないでしょう。この分りきったことができ
ず人々はあくせくしているのが常ではないでしょうか。
いずれの道にいても正しく歩みたいものです。

こんな思索にふけているうちに車は甲府の市街を通り
ぬけ、祖父母が静かに眠る菩提寺の山内の横にたどりつ
いておりました。



現代宗教論

(その一)

— 經濟と社会 —

竹中 信常

はじめに

本當のことをいうと、久々に浄土に連載するのだから、読者の皆さんに満足頂けるような傑作を書きたいところだが、いかんせん、編集のおえら方の早急の命令、その上に、筆者自身、目下多忙を極めていて、じっくりとおちついたものが書けない次第である。

今回の三回にわたっての小論は、実のところ他の小誌に連載したものを骨子として、「浄土」の皆さんに合うように書き改めたものである。といっても、それは決して二番煎じというわけではない。むしろ、「精練」されたものとして、うけとって頂きたい。

もう一つ。「現代宗教論」などと、題だけみると読む気もしなくなるような、味もそっけないようだが、筆者のい want とするところは、現代の、この無信仰にみえる時代にも、歴史の上でふりかえてみると、結構それなりの宗教や信仰が生きているものなのである。そうしたうわべの無信仰時代に、そこになおかつ存在する宗教の役割とか働きとかを、いくつかの点にまとめてみようというわけである。

前書にえらそうなことをいって、蓋をあけて本文にかかったら、なんだつまらぬ、ということになるかも知れないが、この点はよろしくおゆるし下さい。

一、宗教と經濟

人間が着て、すべて、住む生活をしているかぎり、経済は人間生活と切りはなすことのできない問題である。人間は経済をぬきにしては生きて行けない。事実、わたしたちが毎日それぞれの職業や仕事に従事しているのも、自分が生きて行くため、家族を養うためにほかならない。

「人間は働くためにうまれてきたのだ」とよくいわれた。

働くということは自分のためであると同時に、他人のためであり、それはいずれも金をもうけ、借金をとり、それを消費して生活するためである。こうして、人間の生活にとって根本的な役割をもっている経済というものに対して、宗教は一体どのようなかわり合いをしているのであろうか。現在の世界の三分の二を占めているのは資本主義経済である。資本主義とは、ごく簡単にいうと、労働によって得た利潤をそのまま報酬として還元しないで、これを蓄積して資本としてさらに拡大発展をめざす仕組である。したがって、ひと頃よくいわれたように「青ごしの金は持たない」といった江戸っ子気質とは逆の行き方である。

しかし、誰でも自分が儲けたものは全部自分のものにして、これを自由に使いたいと思う。ところがそうではなく、働くことはただ金を儲けるためばかりではない。働くことは人間の当然の義務なのであり、どんな職業の人も、自分の仕

事に責任と義務とをもたなければならないという「職業倫理」をとらえたのが、キリスト教の新教（プロテスタント）であった。したがって、経済というものは、このような精神によって支えられてこそ、はじめて健全な資本主義がなり立ち、社会が発展するのであるという。西洋の近代社会が大いに発展したのはこのためであるといわれる。これが最近しきりにその名をきくドイツの社会学者マックス・ウェーバーの考えであった。

こうしてみると、経済の根本には、ただ単なる金儲け主義ではなしに、それぞれの職業に対する責任と義務の精神があり、それは強い信仰の力によって支えられていることになる。仏教では「少欲知足」という。欲するところがすくなくれば、すこしのものにも十分に満足するというのである。

——仕事は大いにしてよろしい。しかし、欲がすくなくれば得たもののすべてを自分のものにしなくてもよい。そこに「施」——ほどこしという考えがでてくる。自分のもっているものを、他の困っているものにほどこすのである。しかもそれは決して、たかぶった心からするのではなく、利用してもらい、活用してもらいという心持ちである。

仏教では、ものを持つことを罪であり、悩みであるとする。「三衣一鉢」といって、仏道を修行するものは、着るも

のは下着と上着と袈裟の三枚、御飯を入れる鉢一つ、これ以上よけいなものをもつことを禁ぜられる。それは、ものをもつと、それを失わぬようにする心——執着がおこるからである。お経の中に

「有田憂田、有宅憂宅」

という言葉がある。田があれば草をはやさぬよう、作物がよくできるように心配する。家をもてば、火事にならぬよう、洪水に流されぬよう心配する。こうしたものがなければ心配はなくなる。

とに角、最底の程度以上にたまぬにこしたことはない。戦時中、空襲をうけて夜もおちおち眠れなかつたが、一度焼けてしまったら、もう焼けるものがないというので、安心して眠ることができたということは、わたし自身戦災に遭って体験したところである。決して負けおしみでなく、実感であった。

お寺でお布施がたまると、これを困った人に貸して利息をつけて返してもらう。その利息で寺の色々な費用に使うことがおこなわれた。また、檀家の人々がお互いに掛金して入用な人に用立て、その利潤を寺のために使う。これが無尽のおこりだが、そのもとには仏教の経済思想がよこたわっていたのである。

こうして、仏教でもキリスト教でも、頭から金もうけがいけないというのではない。反対に、もうけるときは大いにもうけるべきである。ただ、そのもうけ方と、もうけたものの使い方がむずかしいのである。

キリスト教の場合のように、自分の仕事、自分の職業に責任と義務をもってさえいければ、他人のめいわくになるようなアクドイことはできない。また仏教のように、もうけたものをどこそこうという気持さえあれば、単なる金もうけではなく、立派な人助けの方法となる。

現代は近代社会といわれ、経済が政治以上にハバをきかす時代である。また消費経済とかいって、「消費は美德なり」とばかり、ものをどんどん捨ててしまう。一方、金さえあれば何でもできるといわれるが、しかし、その金のためにサギをしたり強盗殺人をしたりするものもいる。少欲知足などという消極的なことは現代には通用せぬが、ものをいかし、ひとのために役に立つ経済ということは、どうしても仏教の思想を根本にせねばなり立たないようである。

二、宗教と社会

「人間は社会的動物である」といわれる。まさしくそのとおりで、人間は一人切りでは生きていけない動物である。

「社会」というものは人間の世界にだけあるのではなく、

蜂や蟻のような昆虫から猿や象や縞馬なども何匹か何百匹かが集って社会をつくっている。ただ動物の社会と人間の社会との根本的なちがいは、人間は自分たちが社会生活をしているのだということを、しっかり自覚しているが、動物にはこのような自覚がなく、本能の命ずるままにむらがり集っているにすぎない。

社会生活を自覚するということは、自分というものと社会——つまり他人との関係を意識することである。いわゆる人間関係をうまく保ち、自分と他人とがよく、協力し合っているところに、人間社会の特質がある。聖徳太子の十七条憲法に「和をもって貴しとなす」といわれるゆえんである。

人間の社会の基礎は人間関係の調和の上になり立つのであるが、実際にはこれがうまくゆかないことが多い。一軒の家の中での親子・夫婦・兄弟の関係からはじまって、職場での同輩、先輩、上役との関係。さらには大きく国と国との関係など、いずれもむずかしいことが多い、さまざまな事件が起きているのである。

それゆえ、人間関係をうまく保っていくには、どうしても精神的な支柱が大切である。つまり宗教的な信仰をもととしてゆくことである。仏教ではどんな人間でも魂の奥底には仏性——仏になれる素質をもっているという。したがって、身

分上は先輩後輩であり、職場では上役と部下であり、社会的には金持であり貧乏人であっても、根本的にはすべてみな「仏の子」である。人間はみな同じだと思えば少々ケンカをしても仲なおりができるし、時には助け合うこともできるわけである。

法然上人は弟子たちにむかって、念仏をとなえるものはすべてアミダ仏の子供であって、すこしのちがひもないものだ。学問のあるなし、財産の多少、身分の上下などアミダ仏の目からすれば全然区別がなく、みんな仲よく手をつないで念仏をとなえよと教えられている。

社会が健全に発展して行くには、その基礎となる人間関係がしっかりしていなければならず、その人間関係は宗教的平等観によって正しく保たれるのである。仏教が慈悲の精神を説き、キリスト教が愛の心を教えるのもすべてこのゆえんである。人間社会の基礎が宗教的平等思想にあるということをはっきり示しているのが、宗教で説く天国や極楽の世界である。キリスト教の天国、仏教の極楽世界はいずれも人間の理想世界を描いたものである。極楽はただブラブラ遊ぶところではなく、人々が協力して仏の教えを学ぶ世界なのである。しかも極楽の人々には身分の上下、年令の老若、財産の有無などはなく、まったく同じ人間としてのみ仏の教えを忠実に

守っているから、いささかの争いもねたみにくしみもあり
ようはすがない。まさしく理想的な社会生活を送っているの
である。

こうした理想的な社会をこの地上に実現しているのが、キ
リスト教というエクレシヤ（教会）であり、仏教というサン
ガ（僧団）なのである。争いとねたみにくしみのうずまく
人間世界の中で、いつくしみと平和とゆずり合いの理想社会
を形成しているのが教会や寺院の本来のあり方なのである。

お寺や教会がふつうの住宅や建物とちがいて、立派に、美
しく、荘厳につくられるのは、ここだけはふつうの人間世界
とはちがった清潔な宗教社会であることを形の上にあらわす
ためなのである。そしてそこに住む教師や僧侶の生活も、世
の常の人とはちがった調和のとれた健全な社会生活でなけれ
ばならぬのである。

そして人々は、世俗の波に疲れ、よごれたとき、心のやす
らぎを求めて教会や寺院に集るのである。それは極楽や天国
をこの世に求めることにほかならない。お墓参りや法事だけ
にお寺へお参りするのではないのである。

宗教は社会の基礎をなすものであり、人間社会を健全な、
あかるい、平和なものにしていくための原動力なのである。

（続く）

新刊紹介

こうすれば子どもはのびる 高橋良和 著

子供のことを書いては第一人者である高橋先生のこの指導書
は、子供の気持ちになつて親にうったえている書と言つてよい。
何気なく抽出しにしまつている子供の紙屑のようなものも、実は
子供の宝なのであるから、大切にしていやらねばならないと言つた
類の話である。

大人達は、ともすると大人の立場から子を叱つたり、しつめた
りし勝ちであるが、それでは可哀そうだ。子供の立場に立つて、
物を言つたり、教えたりしなければならぬ。子供を持つ親は、
この本を見て思わず苦笑したり、成程と思つたりすることが多い
ことであらう。子供でもない高橋先生がどうしてこうも子供のこ
とを知っているのだろうかと思ひ至るに違ひない。「母であればこ
そ」「ことばをのぼす」「家庭のもつ役割」「子どもには主張が
ある」「遊びのなかの子ども」「くふうする子どもにしよう」
「子どもを育てるには」と内容も豊富である。童心まんだらで有
名になつた先生ではあるが、その道四十年の経験は、よく子供の
心をつかんでいる。もう著書も五十冊になるそうであるが、この
書は、円熟した先生の人格もよく出てゐる。子供を持つ母として
は、是非一読してもらいたい本の一つである。漫画入りでもある
ので、二百四十頁もある本であるが、知らぬ間に読み終えて、教
えられるところが多い。

（すずき出版—東京都台東区蔵前二—一七—三、四五〇円）



唯円 人間のねがいと運命とは見知らぬ人のように無関係なのでしょうか。いや、それは多くの場合寧ろ暴君と犠牲者とのような残酷な関係なのではないか。「かくありたい」との希望を、「かく定められている」との運命が蹂躪してしまうのでしょうか。どのような純な、人間らしい、願いでも。

親鸞 其処に祈りがある。願いとさだめとを内面的に繋ぐものは祈りだよ。祈りは運命を呼びさますのだ。運命を創り出すと言ってもいい。法蔵比丘の超世の祈りは地獄に審判されていた人間の運命を、極楽に決定せられた運命にかえたではないか。

『出家とその弟子』から更に引きましたが、これは明らかに一つの「応驗」を提示してくれたものと言えましょう。亀井勝一郎がこの箇所について述べています。「祈りはここに生の勇気となる。運命に対する忍従ではない。諦念ではない。祈りは一の創造的行為であり、転身なのだ」と。

苦というものがある以上、やはり私達は何かに縋（すが）らなければなりません。祈るということ、必ずしも苦しみから脱し切れるわけではありません。しかし、祈るということの持つ意義は、生命の流れと密接に連がったところで深くかみしめてみることにあって、初めて信の在り方をうかがうことができるということです。私達は、ただひたすらに祈るということで、自からの運命を自分で切り開いて行こうということです。絶対の信念を持たんとするのです。

阿弥陀如来は過去において、生ある一切のものを救おうと、四十八の大誓願を立てられました。これこそ、正しく私達凡夫共の縋るべき唯一の絆でありましょう。私達の祈りが「仏の耳に入り、心を動かせば」とほのかに希念するのです。

ご法語をいたたく

うたがひてこれを信ぜずば、弥陀の誓願、
釈尊の所説をなしくして、そのしるしあるべ
からず。ただあふきて信すべし。

(三部経釈)

三部経釈はごく平易に簡単に、浄土三部経
の要点についてお説きになったものでありま
す。その中でこんな話のつています。

釈尊御在世当時の印度に善婆という名医が
いて、万病によくよく妙薬を調合していまし
た。病人はこの薬を服用して、病気を直して
いたのですが、病人はこの薬の中にどのような
薬草が何割入っていて、どのようにして調
合されているのかは知らないわけです。もし
病人がこの妙薬を信用しないで、自分のよう
な重病にはたして効目があるかどうかを疑い
結局この薬を服用しなかったとしたら、名医
の善婆といえども手の施しようがないわけ
であります。念仏もこれと同じことであって、
自分のように煩惱悪業の病いが重いものにと
って、お念仏によって果して極楽往生ができ

るかどうか疑わしいと思つて、お念仏を唱え
なかったならば、弥陀の誓願、釈尊の所説は
空しいものとなるわけであるし、お念仏の功
徳もないのと同じことになります。ただ阿弥
陀さまの本願を仰いで、これを深く信仰しな
ければいけません。

そしてこの一節は次の一句で結んでいます
「崑崙の山（名玉の産地）にゆきて、玉をと
らずしてかへり、梅檀（名香の木）のはやし
にいたりて、枝をよぢずしていでなば後悔いか
がせん。自ら思量すべし」

そして

「弥陀本願のころは、かくのごとくさとれ
とはあらず。ただふかく信心をいたしてと
なふるものをむかへんとなり」
と教えられています。

若い人は何事でも自分が納得しなければ信
用しません。若い人の考えは、理論によつて
構成してゆきます。従つて理路整然とした考
えの裏付けがあるか、或いはまた実験の結果
の証明を欲しています。このことはまことに
当然なことであつて、ものを考える態度とし
ては終生持ちつづけてゆきたいと思ひます。

しかし先輩の人となると、二通りの型にな
ります。一にはもの事を判断するのに、自分
の体験だけを基とする人です。この人は自分
の体験だけを尊いものとし、自分の経験した
ことだけが正しいと思つているわけで、片目
しか見えない人であります。二には自分の体
験は範囲が狭く、永い歳月も夢のように過し
てしまつたと反省し、自分の経験以外の別な
世界をも知りたいと願う人であります。

後者の人にとっては、精々努力したつもり
の理論的分野であつた筈であるのに、実は自
分の人生に大した役割を持ち得なかつたこと
を知っているわけで、両目をしっかりと見開い
ている人であると思います。そこに初めて信
の世界が開けるのではないのでしょうか。今更
のように日暮れて通達しの感を深くしている
人にとつて、底の見えている知識が人生にと
つて、どの程度の利益となるのでしょうか。
法然上人は今度この世に生れてきたらと、
「我もし人身をうけば、大愚痴の身となり、
念仏動行の人たらん」
と常に仰せになっていました。

(村瀬秀雄)

座右の銘

その1

私の生活指針三則



中 島 真 孝

一、残物は食わす

私が尋常小学校（当時は尋常小学四年、高等小学四年でありました）二、三年生頃であったと思います。その尋常小学校の修身教科書にこんな話がありました。

ある旅人が街道筋の茶店の店先の縁台に腰を掛け、団子を食べ茶を飲んで休息した。そして食べ残った団子をその辺に遊んで居た子供達に与えた。子供達は喜んで食べたがそのうちの一人の子供は食べようとしなかった。それで仲間の者が何故に食べないかと尋ねると、その子供の曰く、

「他人の食べ残し物などを何とて貰うて食うべきや」とぞいえる。とあった。

この話は妙に私に感動を与えました。子供でも偉い見識を持ったものだ、と深く感じ入ったのでありました。後年私が東京高等師範学校（今の東京教育大学の前身）を卒業して青森県師範学校教諭として赴任して行く時に、私は同級生の一人に云いました。

「私は教師にはなるが教員にはならない」その友人「教師は教員ではないのか」

私「いや、違う、教師は教えて月給を貰う

教員は月給を貰って教える。

友人「結局同じではないか。」

私「いや、違う。教師は教えて月給を貰うのだから、教えることが主で月給は二の次ぎである。従って教師は月給によつては動かない教員は月給の多い方へ行く、教師は左様なことはしない。」

友人「さあ、そんな考えが何時まで続くかな」其後の私の学校教師生活四十年、その四十年をこの考えで一貫し得たと自ら微笑んでいる。これは小学校生徒の時の「他人の残物などを何とて貰うて食うべきや。」の精神が根底をなしていると思つて居る。

二、礼儀先ず立つ

今は故人になれましたが、大本山増上寺第八十一世法主大島徹水大僧正に私はいろいろ御指導を頂いたのであります。或る時大僧正に「私の生活指針になるような文字を御染筆願います。」と申上げましたところ、御快諾下さいまして、数日後に伺った時、大僧正は「これはあなたが先日いわれたものです」と云うて

「礼儀先立而真道生」

44

墨痕鮮やかに書かれたものを頂きました。そして「これは私が若い時に、尊敬していた或る先生から頂いた言葉です」と云う御言葉を添えて下さいました。私は私の居室の床の間に此一軸をかけて日々々々服膺して、真道を実践することに努めて来たのであります。近時礼儀作法が乱れている、道義が頹廃していると云われ、人間性の不在など叫ばれています。戦後の日本はいろいろの点で大きな変革が行われています。これにはそれぞれ理由のあることであつて簡単に結論が出されませんが、少くとも形の上から見ても「礼儀先ず立て真道生ず」は正に頂門の一針であると思ひます。日本最高の学府である東大紛争事件の推側を見ていると、其理由の如何に拘らず、大河内総長に対する学生の態度について真に寒心に堪えないものがあります。

三、思想を生活化する

「如何なる思想も生活化されなければ意味がない。
如何なる生活も人のためにならなければ価値がない」

これは私が或青年に乞われるままに書いて

上げた言葉であります。そしてこれは私自身の生活指針としている所であります。

現代は科学の時代であると云われています。確かに科学の進歩は目覚ましいものがあります。殊に科学的技術の進歩が私達の日常生活を非常に快適な便利なものにして居ります。それは遠い過去の時代と比較するまでもなく、最近十年、二十年前と比較いたしましても私達の日常生活は非常に改善され、快適な便利なものとなりました。しかし私達の生活はそれに相対して、幸福なものになつたと申しますと、必ずしもそうではない、見方によつては却つて私達の生活は、何ものにか追い詰められているような息苦しささえ感じ居るのではないのでしょうか。「欲求不満」とか「人間性疎外」などという言葉が頻に用いられ、「何かが狂っているのだ。それを何とかしなくてはならない」と心配している人々が沢山あります。

科学及び科学的技術の進歩は物質的文化の進歩である。物質的文化は非常に進歩したがそれに平行して進歩しなければならない精神的文化が進んでいないから今日のような社会

状態になつてゐるのである。故に私達は精神的文化の進歩に一段と努力しなければならないと主張する人もあります。

私はこの主張に反対するものではない、むしろ大賛成であり、声を大にして精神的文化の昂揚の必要を叫びたいのであります。その精神的文化昂揚の一方法として前掲の生活指針を立てて行きたいのであります。

我国に於ける精神的文化の研究は決して等閑に付されているとは思いません。特に仏教について申しまして、仏教の研究は相当に盛んに行われていると申してよいと思ひます。それにも拘らず私達国民生活の中に滲透して行かないのは何故でしょうか。それは仏教学なり仏教思想なりの研究が研究に留まつて前進しない。研究の結果の生活化、即ち日常生活に如何に生かして行くかの努力が充分でないためであると思ひます。二千五百年前の釈尊の生活、三国伝来の仏教思想を今日の意味に解明され、それが私達国民生活の中に生かされて初めて意味がある。それでこそ我国の精神的文化と昂揚されて来るのであると思ひます。



いたずらもの 徒者

大南竜昇

仮名法語集の輪読会は、今明恵上人の遺訓「あるべきようは」を読み終えようとしている。ここでは、法語の処々にキラリと光っている忘れられない言葉や現代の仏教者として私達が受け継がなければならない精神について綴りたいと思う。

ところで明恵上人の遺訓の底に流れているものは、峻烈な批判精神である。四十余にのぼる遺訓の一つ一つには、批判と憂悶に満ちたもの、批判のあとにあるべき様相を論じているものなどがある。そしてそれらの批判の内容は、現代仏教にあてはめられても、八百年に近い時代の隔絶と違和は感じられない。現状はむしろ、明恵の目に映った情勢よりはるかに悪化しているのではなからうか。なぜなら、現代の仏教

者の多くは末法の意識が麻痺し、希薄となっているからである。

むしろ明恵上人ほどの厳しい批判者がいた鎌倉時代はよかったかも知れない。その切迫した情勢の中から、鎌倉の新しい仏教運動が興ってきたとも考えられるからである。法然上人が浄土宗を開くに至った精神過程で、重要な位置を占めるものに末法観がある。それは、五濁惡世の現時においては、機根の怯弱な人々は弥陀の誓願に乗じて、浄土に往生するよりほかに救われる方法はないという。この劣弱な機根と本願の教えの二者に不可欠なものが、正像末三時思想の時代観であった。法然、親鸞、そして日蓮にも強い末法観があった。しかし、同じ新仏教運動者の中でも、道元は立場を異にして

いた。彼はいう。

是れ即ち諸仏諸祖の身心なり。学ばずんばあるべからず。若し学ばざれば、祖師道、廃し甘露法滅せん。法界虚空希有にして遇難し。宿植善根の人、乃ち聞くことを得ん。

ところで、明恵もまた仏法に対して道元と同じ考え方をもっていたのである。

彼は、仏法を時代に追従せしめるなどとはもつてのほかだと考えていた。即ち、仏陀の正法こそが万代不易の教法でありそれを厳守実行するものが本当の仏弟子だと信じ、自分に共鳴するものについてこいと高らかに叫んだのである。

それならば明恵には全く末法観はなかったのか。たしかに上人には法然上人たちのような正像末の三時思想はなかった。しかし、遺訓にあるように、末代、法滅という意識は強烈であった。むしろ彼の末法観は現実の僧団に対する絶望から発したものといえるであろう。

しかしながら、明恵は墮落してゆく仏教界や社会を凝視しながらも、人間の機根を励ませば、何時でも正法の世であると確信していた。これが彼の仏法に対する根本的な姿勢であった。

明恵が奈良の東大寺で、学僧たちの党派争いや、南都僧たちの名聞利養にもとづく学問態度、そして彼等の宗教的実践

の欠如を見て紀州白上峰の草庵に居を移したのは、二十二才の頃であった。遺訓には、それらの事情を暗示させるにたる次のような意味のことが記されている。

末代の学習者は、たまたま学習した教法を以ては、名利を莊り、仏法の究極的な意味をつかんでいない。もし、近ごろの学者たちのいうようなことが、本当の仏法ならば、種々の宗教や道徳の中で、悪い教えは仏法だということになるであろう。

と。また、上人を訪れて法門を問う人に、仏法の本意を得るとはいかなるかと反問している。

「どのようにむずかしい経文や仏教の哲学をのべた文章を暗記して、学者ぶる人も、近ごろは心の直諦を見ていない」と問者にいうと、彼は何にも答えない。すぐ腹を立ててしまふほど問者には自制心がなくなっている。

「心真諦を見る」とは、仏教を体得するというほどの意味であろうか。

我々はよく「如法に勤める」などという。上人が強く主張していたのは、この如法であった。

末代の仏教者たちが浅ましく思われるのは、彼等が如説修行如実修行を二の次にして、学問的興味だけに陥って、しかもそれを物の用に立てようとして、全く如説修行の心は

見られないことである。

そして、上人自身が聖教にふれるときの信念は次のようであつたという。

我は幼稚の昔より聖教を見るも、仏の思食し企てたる法の趣を知んと思う計にて、別に学生に成んとも人に誉られん共思ふ事は、無りしなり。

明恵が受けとつていた仏教は、研究することでも、安易に信仰することでもなかつた。仏に成ることであつた。そのためには諸仏菩薩や古人の行履を如法に守ることが最も近道であると信じていたのである。

遺訓の中に、世間の面目を莊つて俗境に近づき、寺に仏法を興隆させるためだといつて、田楽や猿楽の装束に心を費して奔走する学生の話が出てくる。それを見て「明恵は仏法に入るというは実に別の事なり」という。そして僧侶の使命について次のように喝破する。

只心を一にし、志を全して、徒に過す時節なく、仏道修行に励むより外には、法師の役はなき事なり。凡そ仏道修行には何の具足も入ぬなり。

明恵のこの厳しさはどうか。我々はこの迫力に思わず知れず尻こみしてはいないか。

この言葉を聞く者は、勇氣を奮いおこし、またある者



は、「俺は駄目だ」と、がつくり頂垂れるかも知れない。

求道者が聖道門的な明恵のこの激しい氣迫に押されて、安易に他の便法を選ぶことは許されない。なぜなら、淨土教もまた如実修行であることにほかならないからである。明恵上人の末法と仏道に對する考え方は以上のものであつた。

※ ※ ※

私は八月号に遺訓の最初の「人はあるべきようはと云う七文字を持つべきなり」を引用して「明恵はあらねばならない姿への復帰を叫び、既成の仏教教団と社会へ厳しい批判を続けたが、彼には一方に自然法爾といつた大らかな世界はもたなかつたのか疑問を抱く」と書いた。ところが、遺訓を読み進んでゆくうちに、上人の他の一面にもふれることができたように思える。

上人は密教と華嚴という、大きな二つの世界を一つにとらえることに一生を賭けて坐禅をし、嚴密という煩鎖な教理をその書にまとめた。そして日常の生活では、自分を取囲む人や、はるばる訪れてくる人々に「あるべきよう」を諄々と説

“御年始のご挨拶がわりに御用を,,

「浄土宝暦」 価 25円・送料 25円 40ページ
50部以上より単価22円 送料実費

「修養ひめくり」 価 100円・送料45円用紙33枚
タテ37cm・ヨコ13cm

会員のかたは単価85円 送料実費 (見本は150円お送り下さい)

発行所 法然上人讃仰会

このたび弊会鑑集連絡所として東京都港区芝公園19号地の1 浄土宗々務支所内に設置いたしました。事務上の手続きご連絡等は上記内法然上人讃仰会宛にお願いいたします。とりあえず今月より、事務を始めましたが、しばらくの間不備なこと多々あるとは思いますが、よろしくお願い申し上げます。

「浄土」講読規定		一部 定価 金六十円		会費一カ年 金七二〇円 (送料 不要)		浄土 九月号	
昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和四十三年 九月二十五日 印刷 昭和四十三年 十月 一日 発行		定価 六十円		編集人 宮林昭彦 発行人 佐藤密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 新光社印刷株式 会社		東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 鑑集連絡所 法然上人讃仰会 電話東京二六二四五九四四番 郵政東京八二一八七番	
東京都港区芝公園十九号地の一 浄土宗々務支所内 編集室 法然上人讃仰会							

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可
昭和四十三年九月二十五日印刷

(毎月一回一日発行)
昭和四十三年十月一日発行

浄土

第三十四卷

第十号

定価金六拾円

(送料六円)